第 487 号
2024 年 1 月 27 日

# 土佐のわらべ

オーテピア高知図書館
子どもの本の読書会だより

《第 509 回(2024 年 1 月 11 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者:9 人
時間:10:00～11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

## 『ナヌークの贈りもの』 星野 道夫/著 小学館

１月の課題図書は『ナヌークの贈りもの』でした。1996 年に亡くなった写真家・星野道夫さんによる写真絵本です。ナヌークとは、イヌイットの言葉で氷の世界の王者シロクマのこと。ナヌークの写真と、神話をモチーフにしたお話で構成されています。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

●神話というよりは詩のよう。静かに時間が流れている。人間とナヌークは昔は同じ「ことば」を話していた。今だからこそ「ことば」を大切にしたいと思った。「おじいさんの最期の息を受けとった風が、生まれたばかりのオオカミに、最初の息をあたえた」というところがすてき。子どもにも“命をつなぐ”ということがよく伝わる本だと思う。

●星野道夫さんが好き。かわいいシロクマではなく、自然なシロクマが撮られている。シロクマが怖くも見えるが、心を静めてくれる本。変わらない自然のありようが感じられる。食物連鎖と言っては申し訳ないような美しい言葉で命について書かれている。子どもには、大人と一緒にゆっくり読んでもらいたい。

●現地で撮った写真に圧倒された。自然に対する畏敬の念と、人間も自然の一部だということを強く感じた。自然の厳しさや動物がいたわりあいながら過ごす様子がわかる写真。「贈りもの」とは、自然との共存だと思う。能登半島の地震を含め、いろいろなことを考えさせられた。

●言葉はシンプルなのに深い。読み手がどう受け取るか、読み手の想像力に訴えかけてくる。星野さんの表現力がすばらしい。自然の中で暮らしてきたおじいさんは、少年にナヌークのことを話してくれた。自分も次の世代に自然の中での暮らしを伝えていきたい。

●きれいな本。北極は白ではなく青だと思った。写真絵本だが、言葉がすごくいい。言葉がしっかりしているから、子どもたちにも伝わる。写真のシロクマの表情から動物の生命力を感じた。星野さんの写真が、芸術的。最後のあしあとの写真が、シロクマの今後を暗示しているよう。

●星野さんの本を初めて読んだ。何もないところで生きている動物たちが、潔いと思った。人間はいろいろなものを抱えている。「生まれかわっていく、いのちたち」という文章が、星野さんの遺言のよう。「おまえがいのちを落としても、わたしがいのちを落としても、どちらでもよいのだ」という、まさにそういう亡くなり方でショック。

●星野さんの写真のシロクマはやわらかい。ナヌークが語りかけてくるような、雄大な感じがする。命の形に違いはなく、相手に祈ると同時に自分のことも考えるというお話。イヌイットの神話にも興味がわいた。年齢を問わず、子どもは喜びそう。小さいときは写真だけ楽しむこともできるし、大きくなったら文章も理解できるようになる。

●写真だけ見ると小さな子どもも楽しめそうに思ったが、文章を読むと印象が変わった。深い本。食べられた命は食べたものの命に生まれ変わる。自分も生かされていると感じた。動物園のシロクマと違い、星野さんの写真のシロクマはそれぞれ表情があって、しゃべりだしそう。

●たくさんの人に読んでもらいたい本。星野さんの写真には、毎日を生きるシロクマが収められている。写真からも、ナヌークが少年に語りかける言葉からも愛情が感じられた。「われわれは、みな、大地の一部」というところが好き。人間もナヌークも同じ自然の中で生きていて、どちらが死ぬことになっても、それも自然の中で起こること。

次回 2 月 8 日(木)10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室
📖『ヤンネ、ぼくの友だち』 ペーテル・ポール/作, ただの ただお/訳 徳間書店
※申込み・参加費は不要です。